（様式１）

令和７年度　学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立寺島中学校
校長名	田中　茂和

１　本校の学力に関する状況

（１）墨田区学習状況調査結果から

成　　果	課　　題
・第 3 学年理科の「知識・技能」、「思考・判断・表現」については唯一、学年が上がるごとに平均正答率が向上している。また、区目標値等と比べ 7 ポイント近く上回ったことや、上位層と下位層の割合が転位した。 ・国語、数学、英語については全学年ともに「知識・技能」、「思考・判断・表現」の平均正答率が目標値に対して同程度から最大 7 ポイント近く上回った。 ・全学年の社会「基礎」の正答率は区や国に比べて 0.7～2 ポイント近く上回っている。	・全学年の社会について、学年が上がるにつれて上位層の割合が 50%を下回り、下位層の割合が 25%を上回っている。元々、社会の上位層の割合が高く経年結果から減少しているが、下位層の割合が高くなっている。既習事項の定着を把握しつつ課題改善に向けた指導方法の一部見直しが必要。 ・第 1 学年の全教科「知識・技能」、「思考・判断・表現」の平均正答率は、区や国の目標値より-4～7 ポイントの開きがある。また、下位層の割合も経年結果からみても高い割合がある。このことから、下位層に向けた授業展開の工夫改善や確実な学習定着を目指すようにする。

（２）意識調査結果から

成　　果	課　　題
・リスク管理「学級の規範意識」では、全学年、全学級が全国値に比べて 4～5 ポイント上回っている。学校全体の指針が全学級に行き届き、規律ある学級生活が過ごせている。 ・リスク管理「対人ストレス」では、全学年、全学級が全国値と比べて 0.6～5.3 ポイント上回っており、特に第 2 学年、第 3 学年では 2～5 ポイント高い。第 1 学年時は十分な対人関係がとれていない状況から数値が低めであるが、学年が上がるにつれて学級内の対人関係が良好になり順調な学校生活が過ごせていることが読みとれる。	・自己認識、社会性が全国値に比べて-2 ポイント以上低い項目が多い学級については、リスク管理「学習意欲」の数値も全国値が低く、区学習状況調査結果の学級別平均正答率も低い。第 2 学年、第 3 学年も経年の傾向をみると同様の傾向がある。学級間の学力差にも結び付いている。 ・左記「成果」にあるように、学級環境「学級の規範意識」や「対人ストレス」の数値が全国値と比べ高かった場合でも、自己認識、社会性が全国値を下回る項目が多い学級については、各教科正答率度数分布表内の平均正答率が低く表れる傾向がある。下位層の改善や学力の底上げに、体験的・活動的な学習の機会も並行して検討していく。

（３）墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成　　果	課　　題
・英語コンテストをはじめ 5 教科のコンテストにて表彰を行っていることで、高得点を得ようとする生徒数が一定数いる。学習系と行事系が交互に実施していることから、学年が上がるにつれて自主的に切り替え取り組める姿勢が身につき、特に第 3 学年はこの姿勢が定着しており学力調査の結果にも表れている。 ・英語、漢字、数学の各検定では生徒数減少に伴い受検者数は減っているが、受験率は横ばいである。中でも漢字検定では、準 2 級の受験者数が 1.5 倍に増加した。資格取得の関心は依然として高く現れている。	・学年が上がるにつれて、家庭学習や配信課題に取り組もうとしない生徒が顕著になっている。そうした生徒に個別に呼びかけたり支援をしたりしているが、生徒自身が持続した姿勢が定着しにくい。引き続き、自立した学習姿勢の育成について保護者も含めて働きかけを行う。 ・今回の区学習状況調査の結果や経年結果から、一部学年において数値的に低い傾向がある。従前の指導方法や他学年での指導と同様に行わないとした指導や計画の見直しが必要になる。

２　本年度の学力向上に関する主な取組

（１）授業規律五箇条の徹底に向けた取り組み

【チャイム着席を守る・授業中立ち歩きしない・授業中の私語をつつしむ・授業を受ける意識を高める・授業開始と終了に元気よく挨拶をする】

・授業に携わるすべての教員が、学力向上を見据えた取り組みを行う。
・授業規律の指導と徹底に向けて、揺るぎのない一貫した指導の継続を図る。
・授業規律の点検を年２回１週間実施する。点検結果を全校に周知し生徒の切磋を促す。

（２）基礎学力や学習習慣の定着を目指した取り組み

・教科担当と学年教員は、生徒の学習状況等を共有し、学習管理と運営を協働にて行う。
・家庭と連携し学習習慣の定着と学習量の向上を促す。また、配信アプリを活用して学校内外の学習に関する案内を家庭へ周知する。
・学年、教科、単元内容をもとに、宿題や家庭学習などの課題に難度をつけたり量を増減したりと変化を設けて取り組ませる。
・教科コンテストなど、成果に応じて表彰などを行う外的動機づけの機会を設け、学年が上がるにつれ内的動機づけの割合を高める。
・ミライシードや、ふりかえりシートの発展問題を取り入れ、学習の定着度を実感できるようにする。また、生徒によっては教科作成の資料を取り組ませて、学力差の補間を行う。
・学力調査や定期考査などの結果より、下位層を対象とした夏季補習教室や昼休み補習を実施し、基礎学力の定着を図る。

（３）定期考査や小テストによる学習の定着を読み取る取り組み

①　定期考査への計画的な学習予定の作成と振り返り

・3 週間前に考査範囲表を配付し、心構えと計画的な学習予定を作成する。

・学習予定による視覚的な学習の進捗の把握と、学習不足教科を補えるようにする。
・定期考査後に学習の振り返りを行い、課題のある教科には自発的に質問等を行う。

② 放課後一斉学習会（年４回）
・定期考査に向けた意識付けと、学習における疑問の解消を図る。
・夏季補習教室に参加した生徒や、定期考査等で結果が思わしくなかった生徒に対し、教科担当教員から放課後一斉学習会への参加を促すなど行い、学習せざるを得ないきっかけを築く。

③ 小テストの実施（定期考査までに 1～2 回）
・定期考査に向けた学習時間や量を緩和するために、教科単位で小テストを実施し、学習定着の度合いと生徒個々が状況を把握する機会とする。

３ 「令和８年度 墨田区学習状況調査」における目標

（１）目標

・国語では全学年において、「漢字を書く」と「文章を書く」の無回答率を 11%未満または 20%未満に抑える。
（現第 1 学年「文章を書く」4 項目 26.7%→19.9%以下、現第 2 学年「文章を書く」4 項目 13.8%→10.9%以下を目指す）
・社会では、学年が上がるにつれて上位層が減少している。学年が上がった際の減少率を-22%に抑える。
（現第 1 学年上位層 33.0%→第 2 学年 25.7%、現第 2 学年上位層 30.3%→23.9%を目指す）
・数学では、下位層の増減率を±15%に収める。
（現第 1 学年 34.1%→第 2 学年 29.0～39.2%、現第 2 学年 33.9%→28.8～39.0%を目指す）
・理科では、下位層の割合を 50%未満に抑える。
（現第 1 学年 45.5%→49.9%以下、現第 2 学年 47.7%→49.9%以下を目指す）
・英語では、学年が上がるにつれて下位層が大幅に増加する。第 1 学年から第 2 学年への増加率を 150%以下、第 2 学年から第 3 学年への増加率を 20%以下に抑える。
（現第 1 学年 18.2%→第 2 学年 45.5%以下、第 2 学年 30.3%→36.4%以下を目指す）
・目標値を上回るために、各教科において単元、生徒ごとに分析を行い、学習計画の見直しを図りながら、個別最適な学習方法を提案できるようにする。
・全学年・全教科において、平均正答率が目標値を「上回っている」または「同程度」になるよう目指す。

【参考】　「令和７年度　墨田区学習状況調査」における目標からの結果

結果

・学年が上がるにつれてＡ・Ｂ層が微減しているが次年度は、全教科とも前年比±5%に収める。

（例：国語 令和６年度_2 学年 59.0 → 令和７年度_3 学年 62.0～56.1 を目指す）

→　第２学年の社会、数学、理科、英語が±5%内に収まらず、数値が下回った。

→　第３学年の国語と社会が±5%内に収まらず、数値が下回った。

・Ｄ・Ｅ層も学年が上がるにつれて増加し、Ａ・Ｂ層とＤ・Ｅ層の数値が拮抗する状況にある。Ｄ・Ｅ層では全教科とも前年比＋22%に収める。

（例：国語 令和６年度_2 学年 32.0 → 令和７年度_3 学年 39.0 以内にとどめる）

→　第２学年の社会、理科、英語が目標数値に届かず未達成であった。

→　第３学年の全教科が目標値を達成した。

・英語におけるＡ・Ｂ層の下落率が高いため、令和７年度のＡ・Ｂの割合を 43%以上になるよう目指す。また、Ｄ・Ｅ層が増加しているため、令和７年度のＤ・Ｅの割合 45%以下を目指す。

→　第２学年、第３学年ともに、A,B 層の割合 43%以上で達成した。D,E 層の割合 45%以下で達成した。

・全学年・全教科において、観点別正答率の評価が目標値に対して「上回っている」または「同程度」になるよう目指す。

→　全学年、全教科ともに目標値を概ね達成した。

・目標値を目指すために、各教科が結果分析を行い、学習計画や指導方法の見直しを図っていく。

→　各教科にて実態把握から学習、指導計画の見直しを図り取り組めていた。